

近年のヨハンナ・シュピーリ研究の動向

川島 隆

スイスの小説家ヨハンナ・シュピーリ（1827-1901）は事実上、長篇『ハイジ』二部作のみによって後世に名を残した作家である。この作品がドイツ語圏だけでなく国際的に、特にアメリカと日本において翻訳のみならず映像化作品を通じて圧倒的な人気と知名度を誇っていることは、今さら言うまでもなからう。ただその反面、シュピーリとその文学についての研究は、世界的に見ても決して盛んな分野ではない。例えば我が国のドイツ文学研究者で、『ハイジ』の原題は何かと問われて即答できる者がどれほどいるだろうか。1880年に出版された第一部が『ハイジの修行時代と遍歴時代』（*Heidis Lehr- und Wanderjahre*）、その翌年の第二部が『ハイジは修行の成果を発揮します』（*Heidi kann brauchen, was es gelernt hat*）と名づけられていること、すなわちこの小説二部作がゲーテに範をとった「教養小説」であることは、知る人ぞ知る事実であるにもかかわらず。

しかし近年、シュピーリ研究をめぐる状況は大きく変わりつつある。とりわけ作家の没後100周年にあたる2001年を挟んだ時期に、質・量ともに無視しがたい一連の論考および評伝が世に問われた結果として、今では『ハイジ』とその作者についての文献リストには一定の充実ぶりが認められるのだ。そこで新たに確保されているのは、作品そのもの・作者その人についての情報のみならず、シュピーリが生きた当時の社会で、ひいては我々の暮らす現代社会で「女性」や「子ども」、そして「文学」の置かれた状況を照射する視点である。その意味でシュピーリ研究は、これからの児童文学研究が歩むべき道を指し示す、一つのモデルケースとも見なすことができるだろう。

1. 土台の構築（1969年～89年）

以下ではまず最初に、各国で学生運動が高揚した1960年代の終わりごろから1989年の東西ドイツ統一へと至る時期の研究状況を、簡単に総括しておきたい。この約20年間に、シュピーリとその作品を研究するための前提が、おおよそ出揃ったと言える。その始点に位置づけられるべきは、戦後ドイツの児童文学研究の水準を押し上げた功労者クラウス・ドーデラーが1969年の著書『児童書の古典——批判的考察』のうち一章を割いて『ハイジ』を論じた、「ヨハンナ・

シュペーリの『ハイジ』——現実を美化した怪しげな道德世界¹ であろう。そこでドーデラーは、『ハイジ』における教訓主義や「都会／田園」の単純な二項対立図式、さらに宗教的＝教訓的テーマで社会問題が隠蔽されている点などへ批判を展開し、後の研究の叩き台となるべき視座を提供した。この問題意識を継承するのが、アメリカの研究者ジャック・ザイプスによる論考、「ハイジを打倒せよ、もじゃもじゃペーターを打倒せよ、革命に万歳三唱——西ドイツの新たな社会主義児童文学に向けて」² である。現在、グリム童話の社会学的研究によって日本でも知られているザイプスは、ここではシュペーリ作品を「幼見的・退行的なファンタジー」の産物と見なして断罪する。彼は作中で説かれるキリスト教道德を体制順応主義として、自然賛美の要素を現実逃避として指弾した上で、その混合が子ども読者にとって有害だと説くのである。

以上のようなイデオロギー批判の立場からの否定的議論が提出される一方で、この時期には、シュペーリ関係の資料が相次いで出版されている。すなわち、同時代スイスの作家コンラート・フェルディナント・マイヤー（1825-98）との往復書簡集³ およびシュペーリの母で詩人のメタ・ホイサー（1797-1876）の手になる『家庭年代史』⁴ である。シュペーリ自身はその死に際して所蔵の書簡や草稿類を焼却しているため、上記二冊は一次資料として貴重なものとも言える。また1980年代には、作家の生地ヒルツェルの郷土史家ユルク・ヴィンクラーが手がけた伝記研究が続けて教冊、刊行された。⁵ いずれも、作家ゆかりの地の写真など図版を多数収録しており、視覚性を重視した作りになっている。

¹ Doderer, Klaus: Johanna Spyris „Heidi“. Fragwürdige Tugendwelt in verklärter Wirklichkeit. In: *Klassische Kinder- und Jugendbücher. Kritische Betrachtungen*. Weinheim / Basel 1969, S.121-134. 先駆的なシュペーリ批判の例として、教育学者 H・ヴォルガスト（1860-1920）の社会主義的な児童文学論『我らの児童文学の貧困』（*Das Elend unserer Jugendliteratur*, 1896）をドーデラーは挙げている。Ebd., S.125. 他に1960年代までの『ハイジ』批評史については、ebd., S.130-133の摘要を参照。なおドーデラーの議論は、例えばシュペーリの文体を分析してアイヒェンドルフ文学になぞらえた H・キーペに見られるような、『ハイジ』の古典的価値を追認する風潮への批判を意図している。Kiepe, Hansjürgen: *Landschaft Gottes. Zur Rolle der Verbzusätze in Johanna Spyris „Heidi“*. In: *Wirkendes Wort* 17 (1967), S.410-429.

² Zipes, Jack: Down with *Heidi*, Down with *Struwwelpeter*, Three Cheers for the Revolution. Toward a New Socialist Children's Literature in West Germany. In: *Children's Literature* 5 (1976), S.162-180. 同論考でザイプスは、H・ホフマン（1809-1894）の絵本『もじゃもじゃペーター』の暴力的かつ権威主義的な性格をも組上に載せ、『ハイジ』と並べて反面教師として扱っている。Ebd., S.164f.

³ Zeller, Hans und Rosmarie (Hrsg.): *Johanna Spyri und Conrad Ferdinand Meyer. Briefwechsel 1877-1897*. Kilchberg 1977. 付録として、マイヤーの姉妹宛および母宛のシュペーリの手紙を収録。

⁴ Heusser-Schweizer, Meta: *Hauschronik*. Kilchberg 1980. ホイサーの作品としては、詩集『隠れた女の歌』（*Lieder einer Verborgenen*）が1858年にライプツィヒの Holtze 社から刊行されている。その増補版である『詩集』（*Gedichte*, 1863）および『第二詩集』（*Gedichte. 2. Sammlung*, 1867）も同社から。

⁵ Winkler, Jürg: „Ich möchte dir meine Heimat einmal zeigen“. *Biographisches zu Johanna Spyri, Autorin des „Heidi“; und ihren Hirzler Vorfahren*. Hirzel 1982; Fröhlich, Roswitha / Winkler, Jürg: *Johanna Spyri. Momente einer Biographie, ein Dialog*. Zürich 1986; ders.: *Johanna Spyri. Aus dem Leben der „Heidi“-Autorin*. Rüslikon-Zürich 1986.

1980年代の末に出されたハイディ・M・ミュラー「ヨハンナ・シュピーリの『ハイジ』連作における教育論——ある〈教養小説〉の文学史的座標」⁶は、作品から読み取られる教育観を、ルソー、ペスタロッツィ、ゲーテの思想と具体的なレベルで比較したものである。その比較から明らかになるシュピーリの立場は、自然礼賛一辺倒でも単なる啓蒙主義でもなく、その中間に位置づけられる。ただし、敬虔主義的な宗教性が突出しているのがシュピーリの最大の特徴だとされる。ミュラーの論文は、それまでの研究の貧困状況へ一石を投じることを企図したものであり、シュピーリの精神的な位置についての基本的理解を示すことに成功している。これをもって、さしあたり研究は新たな段階に入ったと言えよう。⁷

2. 読みの深化 (1990年～2000年)

上記ミュラー論文は、たしかにドーデラーやザイプスの戦闘的な立場には距離を置いている。とはいえ、学術的な厳密さを求める方向は、必ずしも価値中立的な立場に収斂していくわけではない。1990年代以降の論者たちは多かれ少なかれ、ドーデラーらの提示したイデオロギー批判的な観点を意識しつつ、シュピーリ作品の再評価を試みていくことになる。そこで新たに脚光を浴びるのは、一つにはジェンダー論的な視点である。これを作家・作品の解釈に導入することで、それまでの研究においては見落とされていたさまざまな不協和音や亀裂をシュピーリの文学は内包していることが明るみに出され、そういった点をあえてポジティブに評価していこうとする研究方向が生じてきたのである。これは現在に至るまで大きな流れを形成している。

2-a. ジェンダー論の導入

その文脈で、まずベッティーナ・フレルマンの野心的な論考、「解放されたミニョンの妹」⁸を視野に入れたい。そこで著者は、シュピーリ作品のうちで『ハイジ』が実のところ例外的なまでに教訓主義的・宗教的要素の少ない作であることを確認した上で、作中に描かれたハイジの心の病について、顕示的に描かれている宗教性のレベルとは必ずしも一致しない心理的リアリティーの位相を指摘する。これをフレルマンは、自らの結婚生活において深刻な精神的危機にあったとされる作者シュピーリの体験が反映されたものと捉え、その真に迫った表現を高く評価するのである。そしてさらに、「ハイジ」の像をゲーテの描いた「ミニョン」と詳細に比較することで、

⁶ Müller, Heidi Margrit: Pädagogik in Johanna Spyris 'Heidi'-Büchern. Literaturgeschichtliche Koordinaten eines „Bildungsromans“. In: *Schweizer Monatshefte* 69 (1989), S.921-932. [後に *Fundevogel* 96/97 (1992), S.13-17 に再録]

⁷ その他、1980年代までの先行研究については、*ibid.*, S.929f, Anm.2を参照のこと。

⁸ Hurrelmann, Bettina: Heidi, Mignons erlöste Schwester. In: *Neue Sammlung* 33 (1993), S.347-363. [後に *dies.* (Hrsg.): *Klassiker der Kinder- und Jugendliteratur*. Frankfurt am Main 1995, S.191-215 に再録]

この論者は『ハイジ』のアンチ教養小説としての側面を大胆に強調してみせている。この読解により、19世紀当時の市民階級の女性が置かれた地位をめぐる問題系と、その市民的秩序からの「解放」のモメントとを作品に読みこむ道が開かれたと言える。

イギリスの研究者ピーター・スクラインの『ハイジ』論⁹は、同作に関するさまざまな問題を包括的に論じて高い水準にあるが、ここにもジェンダー論的に興味深い指摘が見られる。スクラインは作品の主な源泉として、ドイツで19世紀中盤に流行した文学ジャンルである「村物語」(Dorfgeschichte)、特にペルトルト・アウエルバッハ(1812-82)の『裸足の子』(*Barfußle*, 1856)を挙げ、そこで見られる類型的ハッピーエンドとしての「結婚」のモチーフがシュペーリ作品においては周到に回避されている点に、後者のラディカルな特徴を見て取っているのである。また、後世に書かれた亜流作品と比較した場合にも、恋愛・結婚をあくまで排除する『ハイジ』の異色性は明らかとなるという。¹⁰

アンナ・カタリーナ・ウルリッヒ「教育のための舞台背景としての自然——父の言葉で描かれた母たちの姿」¹¹は、スイス児童文学の古典である『スイスの家族ロビンソン』および『ハイジ』を精神分析的に解釈したもの。細かな言語使用のレベルにまで目配りした、着想豊かな論文である。ウルリッヒはシュペーリ作品の女性像に関して、(老年以外の)成人女性がしばしば否定的に描かれており「母」が存在しない点、その代わりに男性の登場人物たちへ「女性的・母性的な機能」¹²が付与されている点を指摘している。この他に、トーマス・マンの研究で知られるゲルハルト・ヘルレも、『ハイジ』を反・教養小説と見るB・フレルマンの説¹³に留保つきで依拠しつつ議論を展開した「教育州としてのアルムの山——ヨハンナ・シュペーリの『ハイジ』試論」において、市民階級の女性の教養プロセスの破綻を描いたものとして作品を読み解いている。¹⁴

⁹ Skrine, Peter: Johanna Spyri's *Heidi*. In: *Bulletin of the John Rylands University of Manchester* 76, Nr.3 (1994), S.145-164.

¹⁰ Ebd., S.149ff.

¹¹ Ulrich, Anna Katharina: Natur als Erziehungskulisse. Mutterbilder im Vaterwort. Psychoanalytische Deutungsversuche zu zwei Schweizer Kinderbuchklassikern. In: Nassen, Ulrich [et al.] (Hrsg.): *Naturkind, Landkind, Stadtkind. Literarische Bilderwelten kindlicher Umwelt*. München 1995, S.9-24.

¹² Ebd., S.18f. この母親像の欠如についてK・シュペナーは、『ハイジ』第一部における「飲食」のモチーフの象徴的意味合いを分析することを通じ、作中では(ヤギの乳などを通じて表象される)「自然」が代替的に「母」の機能をも担っていると論じている。Spinner, Kaspar H.: *Semiotik des Essens und Trinkens in Johanna Spyris Heidi*. In: Herwig, Henriette [et al.] (Hrsg.): *Lese-Zeichen. Semiotik und Hermeneutik in Raum und Zeit*. Tübingen 1999, S.431-440.

¹³ Hurrelmann (1993). 注8を参照。

¹⁴ Härle, Gerhard: Die Alm als pädagogische Provinz. Oder: Versuch über Johanna Spyris *Heidi*. In: Rank, Bernhard (Hrsg.): *Erfolgreiche Kinder- und Jugendbücher*. Hohengehren 1999, S.59-86. また、作品表層に見えるキリスト教的テーマに対して、潜在的な信仰の危機の問題をヘルレは指摘している。Ebd., S.74-79.

2-b. スイス国家の「神話」

そして1990年代には、作家シュペーリの政治性やその作品のイデオロギー機能に着目した研究が、特にスイスの研究者から自覚的に提起されはじめている。例えばローラント・リースは、19世紀後半からファシズム・第二次世界大戦の時代に至るまでのスイスとドイツの文化的な関係を、この期間のスイスの児童文学作品を手がかりに考察した論文¹⁵でシュペーリを扱っている。その分析によると、シュペーリには強く親ドイツ的な傾向があり、作品内で牧歌的なスイス像を描き出す一方、スイス特有の言葉遣いを周到に避けている。だからこそドイツの広範な読者層にアピールしたと考えられるという。¹⁶

やはりスイス児童文学史の中でシュペーリ作品の位置づけを探ったものとして、ヴェレーナ・ルツチュマン「スイス児童文学における自然と文明、または進歩と郷愁」¹⁷がある。そこで著者は、「アルプス」の像が歴史的にスイス国家のナショナリズムを支える「神話」として機能してきた経緯を踏まえつつ、児童文学作品に描かれたスイスの「自然」の像を、進歩主義と文明批判のあいだの緊張関係において捉えている。ルツチュマンが正しく指摘するように、シュペーリ作品においては文明批判的な方向性が際立っており、その一方で政治的な問題は直接的には回避されている。そして、むしろその点こそ、後世において「スイス」というイメージを固定するのに寄与することになったのである。

2-c. 伝記研究・小説

1997年という年は、シュペーリの伝記が新しく二冊、刊行された年である。そのうち、キリスト教徒としての立場から作家活動を行う児童文学者レギーネ・シンドラーによる『ヨハンナ・シュペーリ——その足跡を求めて』¹⁸は、かろうじて現存するシュペーリ本人の書簡や彼女の母メタ・ホイサーの手記など、ともすれば不足しがちな資料を丹念に読みこみ、かつ想像力を駆使してシュペーリの人物像の再構成を試みる。ところどころ「ヨハンナ」宛に親しく語りかけるといふ体裁をとった抒情的な文体には賛否両論あるだろうが、伝記的な側面からシュペーリ文学に迫ろうとする者には必須の文献であることは間違いない。

¹⁵ Ris, Roland: Vom „Verbrüderungs“-Konzept Johanna Spyris zur „Geistigen Landesverteidigung“. Schweizerisch-deutsche Kulturbeziehungen im Spiegel der Sprache schweizerischer Jugendbuchautorinnen. In: Schweizerische Jugendbuch-Institut (Hrsg.): *Horizonte und Grenzen. Standortbestimmung in der Kinderliteraturforschung*. Zürich 1994, S.33-74.

¹⁶ このシュペーリの言語使用上の特徴は、スクラインも前掲論文で指摘している。Skryne (1994), S.151f.

¹⁷ Rutschmann, Verena: Natur und Zivilisation oder Fortschritt und Heimweh in der Schweizer Kinder- und Jugendliteratur. In: Nassen (1995), S.25-44.

¹⁸ Schindler, Regine: *Johanna Spyri. Spurensuche*. Zürich 1997.

もう一冊、『架空の天空——ヨハンナ・シュピーリとその時代』¹⁹の著者ジャン・ヴィランは、自らシュピーリの遠縁に当たるといふ。こちらの伝記は、時代背景への豊富な目配りをその特色とする。それが必ずしもシュピーリ像を明瞭化するのには役立っていないとしても、彼女本人についての資料が量的にきわめて限られている以上、周辺的な事柄へと目を向けていくのは次善の策として妥当な手段と言えるかもしれない。いずれにせよジャーナリストティックで読んで面白いものに仕上がっている本である。チューリヒに亡命していた作曲家リヒャルト・ヴァーグナーとシュピーリ夫妻の交友関係についても一章が書かれ、詳しく語られている。²⁰

研究の周辺的な事柄として、ここで小説作品にも触れておきたい。まずシュピーリ本人に材を取った作品として、マリアンネ・ヴァルトブルク(1930)の『明るい高み、暗い谷』²¹がある。ヴァルトブルクは主にJ・ヴィンクラーの伝記研究²²に依拠して晩年のシュピーリの姿を描き、自らが創作した児童文学作品の明るい世界とは裏腹の、暗い内面を抱えた女性として印象づけている。あとE・ハスラー(1933)の『イカロスの翼の女』²³は、シュピーリの夫の姪にあたるエミリー・ケンピン=シュピーリ(1853-1901)の波乱の生涯を扱ったもの。彼女は1887年にドイツ語圏で初めて法学を修めた女性であり、²⁴一時アメリカに渡って女子教育の分野で先駆的業績を上げたが、女性弁護士の就業に門戸を閉ざす社会との軋轢に苦しみ、最後はスイスの精神病院で早逝している。それは奇しくも、ヨハンナ・シュピーリが没したのと同年のことであった。

3. 作家・作品研究の新たな地平(2001年～)

そして没後100周年にあたる2001年、関連書籍の出版やイベントの類が相次ぎ、シュピーリ研究は誰の目にも明らかに新たな局面を迎えた。なかでも特筆すべきは、作家エルンスト・ホルターが中心になって編まれた論集『ハイジ像、その立身出世』²⁵と、同年7月にチューリヒで開催された国際会議「ヨハンナ・シュピーリ、人と作品」である。前者のホルターの論集において

¹⁹ Villain, Jean: *Der erschriebene Himmel. Johanna Spyri und ihre Zeit*. Zürich / Frauenfeld 1997.

²⁰ Ebd., S.173-211.

²¹ Wartburg, Marianne von: *Lichte Höhen – Dunkles Tal. Das Leben der Johanna Spyri*. Egelsbach 2000.

²² 注5を参照。

²³ Hasler, Eveline: *Die Wachstflügelfrau. Geschichte der Emily Kempin-Spyri*. Zürich / Frauenfeld 1991.

²⁴ 法律家エミリー・ケンピンが当時の女性運動と行った共闘とその挫折については、Delfosse, Marianne: *Emilie Kempin-Spyri (1853-1901)*. Zürich 1994; Berneike, Christiane: *Die Frauenfrage ist Rechtsfrage. Die Juristinnen der deutschen Frauenbewegung und das bürgerliche Gesetzbuch*. Baden-Baden 1995, S.81-102; 屋敷二郎「エミリー・ケンピン=シュピーリ研究序説」：一橋大学法学部創立五十周年記念論文集『変動期における法と国際関係』有斐閣2001年、83-104頁；同左「法律家としてのエミリー・ケンピン=シュピーリ——ドイツ民法典と女性運動をめぐる」：『一橋論叢』126巻1号(2001年)、37-53頁；同左「晩年のエミリー・ケンピン=シュピーリ」：『一橋法学』1巻1号(2002年)、125-138頁。

²⁵ Halter, Ernst (Hrsg.): *Heidi, Karrieren einer Figur*. Zürich 2001. [以下では、Halter (2001) と表記]

は、作家・作品そのものへの研究のみならず、受容史研究に大きなスペースが確保されているのが目を引く。ここでは、さまざまな言語への翻訳・翻案、映像化、さらには観光産業の問題にまで及ぶメディア横断的な視座が確保されており、現代の児童文学研究にとって一つのスタンダードが示されていると言えよう。また白黒・カラー図版を多数収録しており、古今東西の『ハイジ』の版に添えられたイラストの歴史が概観できるようになっている。ヴィジュアル的にも魅力的な一冊である。

上述のチューリヒでの国際会議には日本からも板東悠美子と高畑勲が参加し、それぞれ日本での作品受容の状況と、アニメーション版 TV シリーズ『アルプスの少女ハイジ』(1974)の制作の経緯について報告を行った。同会議の内容は2004年、スイス児童メディア研究所²⁶によって『ヨハンナ・シュペーリ——人と作品を読み解く』²⁷として世に出されている。ホルターの論集とは執筆陣が一部共通しており、各国における受容史の紹介に力を入れている点などテーマ設定も似通っている面がある。強いて比較するならば、全体として、前者よりもやや専門性が高いと言えるだろう。さらに「付録」としてシュペーリの親戚・知人宛の書簡45通を収録²⁸しており、資料集としての性格もある。

3-a. 作者とその時代

以下では、上で紹介した二冊の論文集を中心に、現在の研究状況を概観する。まず、作家本人および彼女が生きた時代について新たに提示された論点を総括しよう。E・ホルターは、自らが編んだ論集の巻頭を飾る「ヨハンナ・シュペーリとマルリット、孤児の世紀」²⁹において、同時代の女性作家マルリット(本名オイゲーニエ・ヨン、1825-87)とシュペーリを比較しながら時代背景を考察している。ごく保守的な傾向をもつシュペーリに対し、マルリットは自由主義的で女子教育にも積極的であった。その明らかな方向性の相違にもかかわらず、作品内に「孤児」が頻りに登場するのが両者に共通して見られる特徴である。これは19世紀の欧米文学全般の特徴をなすものでもあり、繁栄をきわめた「市民の世紀」が内に抱える実存不安を象徴しているのだという。

²⁶ 略称 SILKJM。スイス児童文学連盟 (Schweizerischer Bund für Jugendliteratur) とスイス児童書研究所 (Schweizerisches Jugendbuch-Institut) が合併して2002年に発足。シュペーリ関係の出版物や未刊資料を多数納めた「ヨハンナ・シュペーリ文書館」(Johanna Spyri-Archiv) が併設されている。ウェブサイト <http://www.silkjm.ch/>

²⁷ Schweizerisches Institut für Kinder- und Jugendmedien (Hrsg.): *Johanna Spyri und ihr Werk. Lesarten*. Zürich 2004. シュペーリ著作目録・研究文献目録あり (S.274-283)。[以下、*Lesarten* と略記]

²⁸ Ebd., S.223-273.

²⁹ Halter, Ernst: Johanna Spyri, Marlitt und ihr verwaistes Jahrhundert. In: Halter (2001), S.9-27.

バルバラ・ヘルブリングの「チューリヒの自由主義政権と葛藤する保守的家族」³⁰は、1848年前後の激動する政治状況の中にシュペーリを位置づける。その際、ヘルブリングは主な資料として、まず作家の兄で自然科学者のクリスティアン・ホイサー（1826-1909）の手紙を用いている。結婚後にシュペーリが暮らすことになるチューリヒでは1840年代中ごろから自由主義政権が成立していたが、彼女とその親族は反対陣営に属していた。また、作家本人が表立って政治の世界に触れる機会はないなかったものの、1852年にその夫となる弁護士ベルンハルト・シュペーリ（1821-84）は、保守系の『スイス連邦新聞』（*Eidgenössische Zeitung*）での編集・執筆活動を通じ、活発にリベラル派への攻撃を行っていたのである。

1997年に新しいシュペーリ伝³¹を出したR・シンドラーは、上記二冊の論集双方に寄稿している。そのうち、『ハイジ』成立に関するニュース——ある女性の生涯の反映としての作品³²では、作家が愛読したゲーテやドロステ＝ヒュルスホフ、讚美歌作者パウル・ゲルハルト、同時代で交流のあったケラーやC・F・マイヤーなど、作品に影響を与えた可能性のある文学者たちとシュペーリの関わりが簡潔に総括されている。間テクスト性に着目して『ハイジ』にアプローチする場合、これらの記述が一つの前提となるだろう。同論文には他に、作品成立当時の作者の交友関係についても若干の考察がある。また「作者と主人公——ハイジは第二のヨハンナか？」³³でシンドラーは、作品の登場人物ハイジと作者シュペーリの単純な同一視を戒めつつも、作品内に描かれた家族像と作者自身の家族関係を比較してみせている。

3-b. 「女性」の視点から

1990年代に急成長したジェンダー論的な研究方向は、今やシュペーリ研究のうち主要な部分をなす分野に発展した観がある。特に国際会議の記録（2004）のほうでは、序文でV・ルツェマンが述べているとおり、³⁴文学および社会において「女性」が果たす役割という視点が、論集全体を通じて前面に押し出されている。同論集に所収のルツェマンの論文「活動的な少女たち／感受性の強い少年たち——ヨハンナ・シュペーリの児童文学作品について」³⁵が、先行研究の

³⁰ Helbling, Barbara: Eine konservative Familie im Konflikt mit Zürichs liberalem Regiment. In: *Lesarten*, S.11-44. 付録としてクリスティアン・ホイサーの書簡を収録（S.28-41）。

³¹ 注18を参照。

³² Schindler, Regine: Neues zur Entstehung von *Heidi*. Das Werk als Spiegel einer Frauenbiographie. In: *Lesarten*, S.45-62.

³³ Schindler, Regine: Die Autorin und ihre Figur. Ist Heidi eine zweite Johanna? – Ein Gerücht, an dem die Dichterin nicht unschuldig ist. In: Halter (2001), S.47-63.

³⁴ *Lesarten* (Einleitung), S.7.

³⁵ Rutschmann, Verena: Energische Mädchen – sensible Buben. Zu den Kindergeschichten von Johanna Spyri. In: *Lesarten*, S.91-106.

問題意識を踏まえたジェンダー論的考察として範例的なものであると言える。同時代ドイツの児童文学作家オットーリエ・ヴィルダームート (1817-77) や同時代イギリス児童文学との比較³⁶を通じて浮かび上がるのは、作者シュピーリが明瞭に保守的な立場をとっていたにもかかわらず、その多くの作品に描かれた少年少女たちが、実は伝統的な男女役割のイメージを逸脱・破壊しているという点である。

同論集に収録されているアリス・エットヴァインの論文³⁷は、女性の大学教育のテーマを少女小説の分野で扱った先駆作として、シュピーリの長篇『ジーナ』(1884)を取り上げる。医学を志しながらも夢を諦めて結婚する女主人公を描く『ジーナ』は、基本的には同時代の女性解放の流れへの反動と見なすことができる。³⁸ スイスのチューリヒ大学では1864年から女子の就学が実現していた(これはヨーロッパではパリに次いで二番目に早い)が、シュピーリは大学での女子教育に反対していた。しかし作品のテキストからは、単なる保守性のみには回収されない作者の複雑な立場もまた読み取ることが可能だとエットヴァインは論じている。

19世紀市民社会における「女性」の地位とシュピーリ文学の関係については、ハルターの論集(2001)でも二つの論文が、特に「医学」という観点から、光を当てている。上述の伝記作者J・ヴィランは、論説「早くから目覚めた、医学へのヨハンナの関心」³⁹において、シュピーリ作品に頻出する心身両面の「病気」のモチーフを、作者の家庭環境および市民家庭の抑圧的な雰囲気と関連づけた上で概観する。ヨハンナの父と祖父は医師であり、彼女は幼少期から医学的なものに触れる機会があったと考えられるという。⁴⁰ これに対してイヴォンヌ・フルーリ「虚弱な母たち、傷ついた父たち——ヨハンナ・シュピーリの児童文学作品における肉体的病気の描写と機能」⁴¹は、シュピーリ作品における「病気」の表象を伝記的要素に還元するのではなく、文学的に特殊な意味を担われたモチーフとして、文化・社会史的に考察する。シュピーリの描く女性が(病名の詳らかでない)「虚弱」に悩みがちなのに対し、男性は事故などで負傷するとされるケースが多い。これは、フルーリの見解によると、まさに女性を「弱き性」として表象する

³⁶ 上述のハルターの論集でもルツチュマンは、やはりヴィルダームートとの比較を通じ、『ハイジ』の宗教的要素を考察している。Rutschmann, Verena: „Gott sitzt im Regimente / Und führet alles wohl.“ Zu den Kinderbüchern von Johanna Spyri. In: Halter (2001), S.207-219.

³⁷ Ettwein, Alice: Johanna Spyris *Sina* im Kontext des zeitgenössischen Mädchenbuchs. In: *Lesarten*, S.63-89. [これは2001年の国際会議で発表されたものではない]

³⁸ 特に、三児の母であったエミリー・ケンピン(注23, 24を参照。彼女は当初、医学部を志望していた)がチューリヒ大学へ入学した経緯に触発された可能性を、J・ヴィランが示唆している。Villain (1997), S.283.

³⁹ Villain, Jean: Johannas früh erwachter Sinn fürs Medizinische. In: Halter (2001), S.65-81.

⁴⁰ なお、その生育環境が一種のトラウマを残した可能性について、Fröhlich/Winkler (1986), S.17-39で論じられている(注5を参照)。

⁴¹ Fluri, Yvonne: Schwache Mütter, verletzte Väter. Darstellung und Funktion physischer Krankheit in den Kindergeschichten Johanna Spyris. In: Halter (2001), S.83-93.

19 世紀的な男女観を反映したものに他ならない。

3-c. トポス研究

ジェンダー論的な方向と並んで重要なのは、やはり 1990 年代の研究の流れを汲む、「アルプス」という文学的トポスが担う意味と機能をめぐる一連の考察である。これに関しては、ハルターの論集に寄稿したスイスの研究者らが力を注いでいる。ゲオルク・エッシャーは「山に名前はない——長篇『ハイジ』における地理的・社会的・美学的な空間」⁴² で、作中に描かれたアルプスの山と都会フランクフルトという二つの空間の対立関係に注目しつつ作品を精読している。その読解によると、暗黙のうちに作品世界の中心に座しているのは（何ら具体的・明瞭には描かれない）「都会」であり、その空間との対比が、辺縁としての「山」の文明批判的な価値を創出するのだという。クリストフ・グロの論考「ハイジ——アルプスの小さな神」⁴³ は、ややエッセイ的な内容ながら、「ハイジ」の物語がスイスの国家意識のため「神話」として果たしたイデオロギー的性格に着目しつつ、ハイジ像にまつわる現象を広く概観して啓発的である。これに続いて同書に収録されているクリスティーネ・ミュラー「ハイジならリンゴに命中させたか？」⁴⁴ は、スイス人の国民的アイデンティティーにとって「ハイジ」と「テル」とが担う機能の違い、特に男女において異なる意味合いを、深層心理学（ユング心理学）のモデルにもとづき分析する。

他にヴォルフガング・ハックルも、19～20 世紀におけるアルプス旅行の文化史というテーマを扱った 2004 年の著書の中でシュペーリ作品を取り上げ、文学作品に描かれた伝統的アルプス像の「通俗化」という観点から論じている。⁴⁵

4. 「文学」の外部へ

アルプス像・ハイジ像をめぐると問題系は必然的に、シュペーリ作品が後世においてどのように受容されたかというテーマに重なってくる。実際、前節で挙げた論者たちが（多かれ少なかれ）言及せざるをえなかった作品受容という問題は、ここ数年のあいだに研究がめざましく躍進した部門であると同時に、最も大きな問題性をはらんでいるようにも見受けられる。以下では最後に、世界各国における受容史と、さまざまなメディアへの展開をめぐると研究を一瞥する。さしあたり、

⁴² Escher, Georg: „Berge heissen nicht“. Geographische, soziale und ästhetische Räume im „Heidi“-Roman. In: Halter (2001), S.277-289.

⁴³ Gros, Christophe: Heidi. Die kleine Berggottheit. In: Halter (2001), S. 115-129.

⁴⁴ Müller, Christine: Hätte Heidi den Apfel getroffen? In: Halter (2001), S.131-139. この同じ著者には他に、シュペーリ作品における女性像を考察した以下の論文がある。Dies.: Warum Heidi nicht erwachsen wird. Oder die Frauenbilder der Johanna Spyri. In: *Fundevogel* 148 (2003), S. 35-56.

⁴⁵ Hackl, Wolfgang: *Eingeborene im Paradies. Die literarische Wahrnehmung des alpinen Tourismus im 19. und 20. Jahrhundert*. Tübingen 2004, S.78-84.

各国語への翻訳紹介の状況を扱ったものを、言語ごとに見ていくことにしたい。

4-a. 各国語圏での受容

『ハイジ』のフランス語への翻訳は非常に早く、原作第一部の出版の二年後、1882年のことである。最初の仏訳者であるカミーユ・ヴィダール(1854-1930)はシュペーリ本人とも直接に親交があり、後に女性解放運動に身を投じた人物であった。ドニーズ・フォン・シュトッカーの「スイス・フランス語圏へのハイジのデビュー」⁴⁶は、この二人の接点を紹介している。

ただし、ヴィダールの訳は現在ではあまり普及していない。フランスの読者は、むしろスイスのフランス語圏に位置する都市ローザンヌの翻訳家シャルル・トリッテン(1908-48)による訳でハイジ像に親しんでいる。トリッテンの一連の『ハイジ』翻訳および続編(全5冊)⁴⁷は、主人公のその後のみならず子や孫の世代までを描き出し、一種の大河小説の様相を帯びている。同作はファシズムと世界大戦の時代における「精神的国土防衛」(Geistige Landesverteidigung)の流れの一環に位置づけられ、その内容にはスイス人の愛国心を強化する意図や、家族の大切さなど伝統的な価値観を称揚する傾向が目立つ。ロジェ・フランションの「ハイジの変容」⁴⁸は、そうした点を批判的に論じている。またエリーザベト・アブゴツツポーンは、トリッテンのフランス語訳文と原作との文体比較を行っている。⁴⁹ その比較を通じて、この訳者が原作の言葉遣いを単純化している点や、ハイジをより消極的に、ペーターをより積極的に描くなど、登場人物の性格を因襲的な性役割に沿わせようとする方向が浮き彫りにされる。そしてイザベル・ニール＝

⁴⁶ Stockar, Denise von: Les débuts de Heidi en Suisse romande. Camille Vidar. In: *Lesarten*, S.107-116.

⁴⁷ 『山の少女のすてきな物語』(*Heidi, la merveilleuse histoire d'une fille de la montagne*, 1933); 『ハイジは成長する』(*Heidi grandit*, 1934); 『若き娘ハイジ』(*Heidi, jeune fille*, 1936); 『ハイジと子どもたち』(*Heidi et ses enfants*, 1939); 『ハイジおばあさん』(*Heidi grand'mère*, 1946)。いずれもパリ Flammarion 社から刊行。このうち最初の一冊は『ハイジ』第一部の翻訳、二冊目は第二部に訳者が後日譚を書き加えた翻案、残り三冊が純粋にトリッテンの手になる続編である。しかし三冊目までは訳者としてもトリッテンの名が記載されず「ヨハンナ・シュペーリ作」と銘打たれており、五冊目は委細不明の「レア」(Réa) 名義で出された。日本では三冊目と四冊目のみが、仏語版とはやや内容の異なる英語版から重訳されている。『ハイジの子どもたち』(村岡花子 訳) 明文堂 1959年; 『それからのハイジ』(各務三郎 訳) 読売新聞社 1979年; 『ハイジのこどもたち』同左 1980年。

⁴⁸ Francillon, Roger: Heidis Metamorphosen. In: Halter (2001), S.237-251. この他に、トリッテン作品を上記の観点から批判的に扱った先行研究としては、Mooser, Anne-Lise: "Heidi" et son adaptation française ou l'aliénation d'une liberté. In: *Modernité et nostalgie. La nature utopique dans la littérature enfantine suisse*. Zürich 1992, S.27-35; Kamber, Isabel: Französische Fortsetzung von J. Spyris „Heidi“-Romanen. In: Müller, Heidi Margrit: *Dichterische Freiheit und pädagogische Utopie. Studien zur schweizerischen Jugendliteratur*. Bern 1998, S.131-157.

⁴⁹ Abgotzpon, Elisabeth: „Heidi“. Übersetzt und verändert von Charles Tritten. In: Halter (2001), S.221-235.

シュヴレルの「フランスにおけるハイジ——不幸なすれ違い」⁵⁰ は、トリッテン作品を含むフランス語圏での翻案・改作の歴史を、原作の姿を著しく歪めた例として、やはり批判的に概観する。

英語圏での受容に関しては、イギリスとアメリカの翻訳史を対比させながら紹介するエマー・オサリバン「スイスの山から来た小さな少女——英訳されたハイジ」⁵¹ が有益な情報を与えてくれる。それによると、英国においては固有名詞を英語化するなど、原作を自文化へと同化させようとする傾向が見られたのに対し、米国では全体にエキゾチズムを強調する傾向が強かったと総括できるという。モニク・シュテーリ「ハイジの新たな故郷——19世紀後半のアメリカ児童文学における子ども像」とマイケル・ハーン「ハイジ、アメリカへ行く」は、互いに類似した観点からアメリカでの受容史を考察する。⁵² 『若草物語』(1868/69)や『トム・ソーヤー』(1876)などが書かれた1865年～1914年の時期は、いわばアメリカ児童文学史上の黄金時代である。そこで『ハイジ』が1884年の翻訳以来、すみやかに人気を獲得した背景には、当時アメリカでもやはり似たような「孤児」のモチーフが流行していたことがあったようだ。

『新チューリヒ新聞』2001年7月7日号に掲載されたミハイル・シーシキン「ハイジの罪と罰——アルプスから来た少女のロシアでの運命について」⁵³ は、シュペーリ受容の問題を軸に、ソ連時代の外国児童文学をめぐる状況を回想した異色のエッセイである。かつて共産党政権下で『ハイジ』はブルジョア芸術として長らく発禁本として扱われ、現在もロシアで一般に知名度を獲得するには程遠い。だが革命前には、すでに翻訳が存在していたという。少女時代にスイスやドイツに滞在したことのある詩人マリーナ・ツヴェターエヴァ(1892-1941)は『ハイジ』を愛読していたらしく、自伝的短篇『鷲の塔』(1933)の中でこの本に言及している。⁵⁴

4-b. 日本での受容とメディア上の展開

日本での受容の問題は、上述の高畑勲によるTVアニメの巨大な影響力ゆえに、「文学」の枠を超えた各種メディアへの展開と商品化の問題を抜きにしては語れない性格のものであろう。⁵⁵

⁵⁰ Nières-Chevrel, Isabelle: Heidi en France. Un rendez-vous manqué. In: *Lesarten*, S.117-137.

⁵¹ O'Sullivan, Emer: The little Swiss girl from mountains. Heidi in englischen Übersetzungen. In: *Lesarten*, S.139-162.

⁵² Stähli, Monique: Heidis neue Heimat. Kinderfiguren in der amerikanischen Kinderliteratur des späten 19. Jahrhundert. In: Halter (2001), S.253-261; Hearn, Michael: Heidi goes to America. In: *Lesarten*, S.163-181. 後者でハーンは、合衆国の文芸批評の分野においてシュペーリ文学がごく冷遇されてきた経緯に触れ、その一因をアメリカの研究者たちの英米中心主義に求めている。Ebd., S.167ff.

⁵³ Michail Schischkin: Heidis Schuld und Sühne. Über das Schicksal des Mädchens aus den Bergen in Russland. In: *Neue Zürcher Zeitung* Nr.155 (7. Juli 2001), S.75.

⁵⁴ Цветаева, Марина: Башня в плочке. In: Dies.: *Автобиографическая проза, статьи, эссе, переводы. Собрание сочинений в 7 томах, том 5.* Москва 1994, S.141-148, hier S.147f.

⁵⁵ 日本国内における研究状況の概観は、本稿では勘念する。全体的な傾向として、児童文学論や教育学の分野

その点、アヤ・ドメニツヒの論考⁵⁶ は特にサブカルチャーの分野における日本の「ハイジ」受容を分析したもので、日本文化論としても読みごたえがある。著者は「かわいい」をキーワードに据え、日本における高畑作品の人気をジェンダー論的に分析した上で、いがらしゆみこ(1950-)の少女マンガ版(1998)にも言及している。板東悠美子「日本におけるハイジ」⁵⁷ は、日本での欧米文学翻訳史の中に『ハイジ』受容を位置づける。野上弥生子の初訳(1920)とそれに続く訳『楓物語』(1925)が主に扱われている。高畑勲の「TV シリーズ『アルプスの少女ハイジ』ができるまで」⁵⁸ は、自らが監督したアニメ番組の制作経緯について語ったもの。原作からの変更点の意図などの説明がなされている。

ヴァルター・ライムグレーバーの「ハイジ——あるメディア的成功の本質と変遷」⁵⁹ は、原作第一部が1880年に刊行されて以来の出版事情⁶⁰ や各国語への翻訳、舞台化・映像化、商品化の経緯などを概観したものである。原作の主要なテーマや人物像が各メディアにおいてどのように変奏されていったかについても、若干の考察がなされている。イングリット・トムコヴィアクの「スイス 50 年代の『ハイジ』映画化」⁶¹ は、スイス映画『ハイジ』(1952) および『ハイジとペーター』(1954/55)を扱う。この二本は、現在では必ずしも芸術的評価こそ高くないものの、戦後の混乱期にスイスの理想像を国内外へ向けて宣伝する上で、看過しがたい役割を果たしたという。なお、原作の小説『ハイジ』を教育の場において教材として使用する効能は早くから議論されていたが、⁶² レナーテ・アムアートは、上記の映像化作品なども資料に用いてチューリヒのジールフェルト校で行った、「ハイジ」に関する特別授業(小学一年生対象)の体験を記してい

で、または紀行文などで随伴的に『ハイジ』へ言及がなされる例は多い反面、同作がドイツ文学研究の場で注目されることは少ない。わずかな例外としては高橋健二による略伝『シュペーリの生涯』彌生書房 1972 年【増補版：『アルプスの少女ハイジととともに』彌生書房 1984 年】がある。また、『ハイジ』の作品内容や日本での翻訳事情などを一通り概観したものと、南(山田)はるつ「ヨハンナ・シュペーリ作『ハイジ』の研究」(I)：東京音楽大学『研究紀要』19 集(1995 年)、85~103 頁；(II)：同左 21 集(1997 年)、91~106 頁；(III)：同左 25 集(2001 年)、145~162 頁；(IV)：同左 27 集(2003 年)、67~94 頁。

⁵⁶ Domenig, Aya: „Cute Heidi“. Zur Rezeption von Heidi in Japan. In: Halter (2001), S.149-165.

⁵⁷ Bando Saito, Yumiko: Heidi in Japan. In: *Lesarten*, S.183-187. 講演形式のまま収録

⁵⁸ Takahata, Isao: Making of the TV Series “Heidi, the Girl of the Alps”. In: *Lesarten*, S.189-204. 講演形式のまま収録

⁵⁹ Leimgruber, Walter: Heidi. Wesen und Wandel eines medialen Erfolges. In: Halter (2001), S.167-185.

⁶⁰ シュペーリの生前・死後の作品出版事情については、J・ヴィランによる伝記研究の第 9 章で、数値データを交えて詳述されている。Villain (1997), S.258-303.

⁶¹ Tomkowiak, Ingrid: Die „Heidi“-Filme der fünfziger Jahre. In: Halter (2001), S.263-275. [後に *Lesarten*, S.205-222 に改訂版が再録]

⁶² 例えば R・プロイアーは、原作小説を用いて(ラジオ劇の制作など)相互作用的な授業を行うことを提案している。Braeuer, Ramona: Johanna Spyris „Heidis Lehr- und Wanderjahre“. Ein Buch für jung und alt. In: *Deutschunterricht* 45 (1992), S.305-310.

る。⁶³ そしてユーリ・ギュールの報告⁶⁴ は、1997年に観光開発地域として指定されたスイス東部の「ハイジランド」⁶⁵ の話題を中心に、ハイジ像にまつわるイメージを観光産業の振興のために動員する企業戦略と、それにとまなう多種多様な商品化の状況を追ったものである。⁶⁶

*

以上のように、狭義の「文学」を離れたアプローチは、シュペーリの人と作品それ自体の研究を圧倒する盛り上がりを見せつつあると言えるかもしれない。つい最近までは、異なるメディアへの移植に対しては、どちらかという否定的な見解が研究者のあいだで支配していた。⁶⁷ だが情勢は変化しつつある。作家没後 100 周年記念の国際会議の記録⁶⁸ の表紙に、日本製のアニメ版に由来する絵があしらわれているのは象徴的である。その変化は、高畑作品をはじめとする映像化作品が、今や原作の読者を圧倒する数の視聴者を獲得している現状に対応しているのだろう。これは、ある意味で起こるべくして起こった変化だと言える。そもそもシュペーリ研究の意義は、『ハイジ』という作品が結果的に引き起こすことになった諸現象の大きさと切り離せないのではないだろうか。その大きさの理由をもつばらテキストの内部に求めようとした場合、その努力がともすれば徒労に見えてしまうほどの。——だとすれば、メディアの枠を超えて拡大しつづける「ハイジ」現象を見据えながら、その状況の分析の成果を作品研究に投げ返すこと、あるいは逆に、作品自体の研究から得られた知見を現状分析に生かすこと。それが今後のシュペーリ研究に残された課題であろう。

⁶³ Amuat, Renate: Heidi im Sihlfeld. In: Halter (2001), S.141-147.

⁶⁴ Cyr, Ueli: Herzfigur und Markenzeichen. Zur Heidisierung im Schweizer Tourismus der Gegenwart. In: Halter (2001), S.187-199.

⁶⁵ ウェブサイト <http://www.heidiland.com/>

⁶⁶ この問題については、Villain (1997), S.201ff および Hackl (2004), S.82ff でも簡潔に扱われている。

⁶⁷ 例えばフレルマンは1993年の時点で、原作のもつ心理的な深みを欠いた無内容な代物として日本製アニメを切って捨てていた。Hurrelmann (1993), S.353. この見方にヘルレも同調し、のみならず原作の映像化を押しなべて「通俗化」に他ならぬものとして扱っている。Härle (1999), S.62f.

⁶⁸ 注 27 を参照。